岡崎のおんちゃんの思い出話

23回生　岡崎昌生

今年二月、七十六歳となり、いわゆる古希を過ぎること六年。この数字からみれば、立派に老人の部に入るが、気分は若く、まだまだ「明日がある。」と希望を持っている。

昭和一七年（一九四二年）土佐中に入り、一九五〇年（以下、西暦による）東京に出てきた。当時、先輩の一回生はまだ四十代前半、社会の中枢で活躍されておられた。その後、先輩・同窓の方々のお世話様になりながら、すでに五十年あまりを経過した。

この間、わが国は、戦後の混乱・貧困を脱し、56年の政府経済白書では「もはや戦後ではない。」というキャッチフレーズが用いられた。以後、多少の景気変動はあったが、社会経済は順調に発展・成長し、64年には、東海道新幹線の開業、東京オリンピックの開催、そして、70年の大阪万博へと続く。

73年の石油ショック（OPECの石油公示価格の値上げ）も乗り切り、高度成長路線を走っていたが、80年代後半になって、地価・株価などの異常な高騰をみることとなる。

一九八九年（昭和六四年）一月、昭和天皇崩御、皇太子明仁天皇即位され、一月八日、「平成」と改元された。

同年末、東証平均株価は、最高の三八、九一五円をつけたものの、翌90年に入り急落、バブル経済は崩壊、その傷跡は各方面に残り、世は不況に苦しみ、その修復に十年あまりを要した。

この半世紀、私自身の来し方を顧みるに、何も世の中の役に立たなかったと自省の念のみであるが、記憶に残っていることを綴れば、

○人間一生五十石

学校を出て、公務員となり、見習事務官として国税局で、部内広報紙を担当し、税の第一線の仕事を通じ税についての勉強をしていた。そのころ、お酒の先生（国税局酒類鑑定官・随筆家でもあった）の知遇を得、表記の言葉を教わった。意味は相当な飲べえでも一生にせいぜい五十石ということ、五十石は一升（1・8リットル）ビンで五千本、大きな数字であるが、五十年飲むとして一日平均三合弱、まんざらでもない量である。私自身すでに終了したかもしれない（他酒類との換算率）。

○税務署とエチオピア

私は、寒さが好きでないので勤務地としては常に「西南の方」を希望してきた。その希み通り、山口県の日本海側の長門という港町に赴任し、農業、漁業を営む地方経済の勉強をしたが、何よりも嬉しかったのが新鮮な多種類のサカナであり、これは高知に並ぶ。二年間ゆっくりと楽しんだ。

東京に帰り、しばらくして今度はエチオピオへ行くようにとのこと、西南の方角に違いはないが、唐、天竺の向こうである。

エチオピアは、高原の国であり、コーヒーの原産地、穀類（粟のようなテフという主食）、ゴマなど農産物、そして、牛は多く、羊、山羊、鶏も多く、豊かな農牧国だった。

当時は、ハイレセラシエ皇帝は御健在で、その威令はすみずみまで届いていた。国教はキリスト教（コプト派）であるが、イスラムも多い。67年の第三次中東戦争のとき、皇帝は「わが国はアラブの海に浮ぶキリスト教の孤島である。厳正中立（strictly neutral）を守る。」とラジオで言われたのを覚えている。

近隣のケニヤ、エジプトそしてベイルートには会議などで数回訪れた。

最近、これらの地域が、時々、テレビ、新聞に登場するが、土地勘があるのは有難く思っている。

○帰国後

国際金融の仕事、企業など何が専門か、フリーターの如く働いたが、98年ガンを宣告され、それを機会に無業となった。ガンは、土佐高同窓のお医者さん方のおかげ様で、手術後八年たつが再び現れない。

現在、横浜の南はずれの駅前アパートに住んでおり、週一回の会合、一日一万歩目標、そして一日二合かぎりとしている。行く末は人様に御迷惑をかけないよう、また、老醜、老残をさらすことのないよう心がけたい。

◇筆山会新会長に岡崎さん

1月23日開かれた筆山会新年会で、会長が吉澤信一さん（16回）から岡崎昌生さん（23回）に交代した。

岡崎のおんちゃんの思い出話（二）

23回生　岡崎昌生

エチオピアという国

◇ アフリカの角

アラビア半島の南、紅海の入口と印度洋の西北部に突き出しているアフリカ大陸の東北端に位置し、国土は一一〇万平方キロ（日本の約3倍）、北緯3度から18度の間にあり、熱帯圏に属する。

東はソマリア、南はケニア、西はスーダン、北はエリトリアおよびジブチの諸国に囲まれた内陸国であり、これらの中で、ソマリアとはその国境をめぐりしばしば武力衝突が起こっている。

◇ 三千年の歴史

その昔、シバの女王（現在のイエメンと紅海を挟んでエチオピア北部を領していた）が、数百頭のラクダに沢山の贈り物を携え、エルサレムにソロモン王を訪ねた。そして、二人の間に生まれた子が、BC10世紀にメネリク一世としてエチオピア王朝を開いたと伝えられている。

以後、ハイレ・セラシエ皇帝（在位一九三〇～七四、第二二五代）に至るまで、その間に盛衰はあったが連綿と続いたこと、そして、19世紀における列強によるアフリカの植民地分割をも乗り切り、独立を保ってきた唯一の国であることを人々は誇りにしている。

一九七四年、社会主義を標榜する軍事クーデター（メンギスツ大佐）により帝政は転覆された。

しかし、国内各地で起こった人民民主主義運動により。メンギスツ政権は一九九一年に崩壊した。

その後、暫定政府の期間を経て、一九九四年には新憲法の制定、議会制度も確立、新しい「エチオピア連邦民主共和国（Federal Democratic Republic of Ethiopia）」として発足し、社会諸般の整備、経済開発に努めている。

◇ 地勢・気候

東北部の砂漠地方、東部の渓谷地帯を除き、国土の大半は、二〇〇〇メートル前後の高原であり、蛾々たる山脈、そして最高峰は四六二〇メートル（北部のラス・ダッシャン）もある。

春夏秋冬はなく、雨季と乾季に分かれる。雨季は6月から8月おわりごろまで、日本の梅雨のようにジメジメではなく一日に何回かスコールのような強い雨が、時には雷鳴を伴い降ってくる。それが過ぎればまたお日さまが現れるといった調子である。

それ以外は2～3月にシャワー程度の雨があるが、あとは乾季で雨は無く、真っ青な空に太陽が輝く、そして夜はまさに手も届くような満天の星が瞬く。

気温は、低地では摂氏40度近く、高い山では摂氏0度にもなるが、都市、農村で人々の住んでいるところは、温帯なみの過ごしやすい摂氏20度前後である。

◇ 人口・産業など

人口は、六五〇〇万人（2000年）、40年前に比べ倍増している。

国民の80％は農牧に従事しており、製造業はまだ少ない。

農作物では主食のテフ（粟粒のような小さい穀物）をはじめ、じゃがいも、菜種、ゴマなど豊富であるが、コーヒーは、当国南西部の地名カッファに由来するといわれ、その生産も多く、輸出額の半分近くに上っている。

家畜も多く、その数人口にも比すべしと思われる。ちょっと郊外に出れば沢山の牛の群れを追う子供達を見かける。2004年の数字によれば、牛（三八一〇万頭）、羊（一六六〇万頭）、山羊（九九〇万頭）であるが、豚は少ない。鶏も三五〇〇万羽と多く、その卵も出回っている。

したがって、皮革加工、農産加工品も輸出されている。

養蜂も各地で行われ、はちみつを蒸留した酒もなかなか美味いものである。

種族としては、アムハラ族、ティグレ族、オロモ族が主たるものであるが、その他大小80ばかりもあるという。

宗教は、キリスト教、イスラームほぼ同数で全体の90％を占め、残り10％はアニミストといわれている。

◇ エチオピア暦（EC）

ユリウス暦に従い、30日ずつの12ヶ月と残りの5、6日をパグメ（おまけの月の意）と呼ばれる1ヶ月とし、1年を13ヶ月としている。

また、西暦（グレゴリオ暦）より7年と8ヶ月遅れており、2006年9月11日がECの1999年1月1日である。エチオピアの観光宣伝には、この「13ヶ月の太陽」が使われている。

岡崎のおんちゃんの思い出話（三）

23回生　岡崎昌生

レバノン

地中海の一番東の奥、北・東はシリア、南はイスラエルに接する面積一万平方キロ、人口三百五十万人の国である。

ちょうど四十年前、アジスアベバ（ジェトロ）駐在の頃、会議などで何回か訪れた。

首都はベイルート（人口二百万）、中東のパリと呼ばれただけあって、しゃれたフランス風の市街、その後背には濃緑のレバノン杉の山並み、その中にアラブの金持ちの白亜の別荘が点在、さらに彼方には三千米級の山々が雪をいただいており、まことに自然と人工のよくマッチした美しさだった。この国の観光の標語に「山スキーと海水浴が同時に楽しめる」というのがあった。

当時、ベイルートは欧亜航空路の要衝として各社が乗り入れていた（日本の新聞もここで積みかえられ二日目にはエチオピアに到着した）。

また、各国の銀行、商社の支店も軒を並べ、オイルマネーをはじめ勃興する中東諸国をとりこんでの国債金融、商社活動の中心地として栄えていた。

フェニキア

「鵬程万里果ても無き
太平洋の岸の辺に・・・」

に始まる高知商業の歌声も久しく甲子園で聞かれないが、二番の歌詞に

「天に聳ゆる香木を
レバノン山の杜に切り
船を造りて乗り出せし
フェニキア人のそれのごと」

というのが続いていた。このフェニキアが現在のレバノン、シリア地方である。

古代（紀元前）、メソポタミア文明の影響もあり相当の繁栄を享受していたという。航海術にすぐれ、地中海貿易に活躍していたが、その中心は現在も同名で残るトリポリ、サイダ（シドンともいう）、ティールなどのフェニキア都市国家であった。

また、地中海を西に進み、カルタゴ（現在のチュニジア地方）に植民都市を建設し、さらに大西洋方面まで制覇したという。学校の歴史の時間で習ったローマとのポエニ戦争で活躍したハンニバル将軍もまたフェニキア人であった。

明治四〇年ごろ作られた市商の校歌はフェニキア人のように海外雄飛をと生徒の士気を鼓舞したものであろう。

レバノン今昔

フェニキアの名はいつの間にか使われなくなり、紀元前後にローマ帝国（のち東ローマ）の領地などを経て、七・八世紀ごろイスラム勢力が伸張してきた。

十六世紀にスレイマン大帝のオスマントルコの版図に組み入れられたが、第一次世界大戦後の国際聯盟によりフランスの委任統括領となり、第二次大戦中の一九四三年レバノン共和国として独立した。

住民は、ほとんどがアラブ系であるが、宗教はマロン派キリスト教徒（東方正教のカトリック）とイスラム教徒がほぼ同数、大統領はキリスト教から首相は後者から選ぶなど両者の共存がはかられ、独立から一九七〇年までは多少の紛争はあったものの平穏が保たれ、中東の中心として生き生きとした都市であった。

しかし、一九七〇年代に入り、パレスチナ難民の流入、さらにはアラファトさんのPLO（パレスチナ開放機関）の移り住みなどにより、イスラエルの攻撃の激化、内戦の勃発のため、平和な美しい街は破壊され、危険極まりないところとなり、各国の銀行、商社などは逃げだし、ペルシャ湾岸のバハレーンに新しい中心を求め、移っていった。

以後三〇年あまり、当地は時々の休戦協定などが結ばれるものの戦火は続き、特に昨年来、ヒズボラ（イスラムの武装勢力）とイスラエルの戦いは日本のテレビ、新聞でもその惨状が報道されている。

根源的にはイスラエル、パレスチナ問題、イラン、イラクなどへの大国の思惑などもからまり、残念ながら、中東の騒乱は当面続くであろう。

ベイルートでのこと

●ルーレットで儲けた

ある夜、友人たちとカジノに行ったが、私は麻雀以外バクチはやらないのでバーで飲んでいたところ、ここに来て一度はやれと誘われた。

チップをもらって、かけてみると最初から当たりが続き相当の量となった。そのうちワーワーという声がするので後をみると西洋人のオバサンたちが、大ツキの東洋人をみて騒いでいるところ、まもなく当たらなくなった。

交換してみると二五〇ドルばかり（当時一ドル三六〇円、約九万円）のボロモウケ。翌日友人たちとビール、ワイン付きの豪華なランチを楽しんだ。

●海辺での酒

ベイルートから南へイスラエル方向の道を一時間ばかり走ったところにサイダという町がある。

その海辺のレストランで、地中海に落ちる夕日を眺めながら、魚のバタ焼きでウイスキーを飲んだ、酸素のうすいアフリカの高原から下りてきた者にとってシーレベルの空気、酒は一入であった。

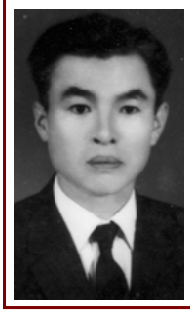
このサイダもイスラエルの攻撃でメチャクチャになったという。

●モーニングコール

用事も終り、明日は帰るという日、ホテルのバーで飲み、フロントに朝起してくれと頼んだ。

朝七時すぎ、約束どおりモーニングコールがあった。しかし、それは「先ほどイスラエルの空軍機が駐機中のアラブ軍機に機銃掃射、このため今日は空港閉鎖とのこと。」

いかに時間をつぶすか。まずホテル地下の散髪屋（イタリア人）に行った。「ずい分白髪がある、時間があれば染めないか」という。こちらも時間をもてあましていたので、OKといった。その結果が写真のとおり、頭のみならず眉毛までもが漆黒となってしまった。早速、帰国（アフリカへ）したとき、あまりにもパスポートと異っているので、入管で尋問された。以後、髪洗いに精を出したが、原状に復するまで何か月か要した。



岡崎のおんちゃんの思い出話（四）

23回生　岡崎昌生

久しぶりに高知へ帰った。新幹線、本四架橋経由で、約七時間。その昔、準急「南風」で朝八時前出発、高松桟橋から宇野に渡り、急行「瀬戸」で、東京着が翌朝十時、約二十六時間を要した。まさに隔世の感である。

街々のたたずまいは随分変わっているが、梅ケ辻で土電を降り、潮江のわが家へ向かって歩くと、東前方には五台山が、南は孕港口から鷲尾山、筆山など、北には緑の山々が層をなして四国山脈に連なる。

そして、その真ん中を鏡川が悠々と流れる。この光景は昔と変らず、いつみても心を和ませて呉れる。

私自身、すでに還暦、古希を過ぎ、今年は喜寿を迎えた。恐縮ながら、この機会に、高知での子供のころを綴ってみたい。

昭和五年（一九三〇）二月、はりまや橋から東へ百米ばかり東種崎町（現在この町名はない）の電車道で小さな店屋をやっていた祖父母の家で生まれ、育てられた。

父は婿養子で、近所に間借りして母と住んでいた。県庁勤めで、農業関係の仕事、出張も多く忙しかったようだが、若く元気だったので休日にはテニス、魚釣り、徹夜マージャンなど、家でのんびりといった姿をみたことはあまりない。

遊びすぎが原因か、私が小学三年の夏、急性結核で此の世を去った。

子供のころのこと

［幼稚園］

菜円場から北へ五十米ばかり入った横町の通称「田淵の幼稚園」に通った。ここは幕末の志士武市半平太の邸跡であった。あまり広くはなかったが、二人の優しいお姉さん先生のお話や歌を聞いたり、スベリ台、砂場で騒いだり楽しい一年であったと思う。

園児男女二十三名元気で卒園を迎える直前、東京ではかの二・二六事件が起こった。

［小学校］

昭和十一年（一九三六）四月、高知市立第一尋常小学校に入った。校門のそばに樹齢五百年という大きな楠があり、新しい制服を着せてもらった私は嬉々として歩いていった。

学校の北側には、高知市民の台所を賄う大きな魚市場（現在は弘化台に移転）があり、そこの威勢のよいセリの声を聞きながら通学した。南側はすぐ鏡川の堤で、雑喉場、九反田の橋で潮江に通じていた。

「さいた　さいた　さくらがさいた」に始まり、読み、書き、そろばんを習った。白紙の頭にはすべて新鮮で面白かった。二年、三年となり、修身が加わった。人と人、人と家族、人と社会、国とのつながり、いかにすべきかの教えは今でも心に残っている。

休みや放課後の行動範囲も次第に広くなり潮江の田んぼ、棒堤の雑木林（旧海南学校跡で、九反田の東）、これらは今は家ばかりで昔日の面影もない。そして鏡川と遊ぶ場所に恵まれ、水泳、魚釣り、セミ捕りなど季節に応じて楽しんだ。ある日、田んぼで食用蛙を捕え、二匹を縄でぶら下げ帰っていると橋の途中で知らないオジサンが蛙を欲しいという。ええよといって渡すと三十八銭呉れた。そのおカネで友達二人で魚捕りの網を買った。その夜、家でこの話をすると、子供が外で獲物を売ったり、おカネをもらったりするものではないときびしく叱られた。

昭和十二年七月、盧溝橋で起こった戦火は次第に拡大、高知の街でも出征兵士を送る歓呼の声を聞く回数も多くなった。

五年になった時、若い元気な先生が担任となられた。この先生から教わったことで、後日大いに役立ったことなど三つばかり。

①日記をつける習慣がついたこと。当初は戦時教育の一環か、「時局帖」と称して、日々の新聞記事やラジオ放送で国の方針や戦争についてのことを一つでも書くようにとのこと。

②天山南路、天山北路。地理歴史の時間の中で、欧亜通商、交通の要衝として詳しく話していただいた。十年後、大学の入学試験で、「西域」について六百字以内という問題の解答を考えるのに非常に役立った。

③水一びん十銭。先生が大分の耶馬溪に登った時、山頂での水の値段、水はタダというのになれているものには驚きであった。後日、アフリカの高原で暮らすこととなり、日々飲み水を買うたびに先生の話を想い出した。

昭和十六年四月、小学校は「国民学校」と改称された。その年の暮、日米戦争が始まり、翌年三月、国民学校を卒業した。

なつかしの小学校校舎は二十年の空襲で焼失し、再建されることなく、校区は第二小学校（現・新堀小学校）に吸収された。

自宅にて

岡崎のおんちゃんの思い出話（五）

23回生　岡崎昌生

土佐中学校へ入学のころ

昭和十七年（１９４２）四月、入学した。丁度前の年の十二月、日米の戦争が始まり、新聞、ラジオでは連日戦争のニュースを華々しく伝え、軍艦マーチの音曲が流れていたが、高知の町は平和そのものであった。

学校は、地番「高知市春野町九十三番地」にあった（現在の春野とは異なる）。土電「梅ケ辻」下車、徒歩約五分も文字どおり筆山の麓、田んぼの中にひろがっている家々の中に二階建ての白亜の校舎が向陽の空に輝いていた。新入生六十七名、入学式を終え、一同先生に引率され、潮江の天満宮に参拝した。学問の神様であるので、よく勉強が出来ますようにとお祈りしたと思う。

◇一年から四年（終戦）まで

一年生は、天下りの方三名を加え七十名が三十五名ずつ二組に分かれて授業を受けることとなった。当時、土佐中では通常の四年分の教課を三年で終了、四年はもっぱら進学向けの勉強に当てられるといわれていた。

地理、歴史、物理、化学をはじめ、体操、軍事教練を含めて、一般課目も万遍なく行われたが、やはり英数国漢に重点が置かれていたように記憶する。英語は、初めてでもあり、珍しく一言一句聞き漏らさないよう注意した。数学は、代数と幾何に分かれたが、かの有名な吉本カマス先生の鞭とトンガリ口の叱咤により、その内容が良く理解できた。

漢文も初めてであったが、漢字でもあり、国見ヘンボ先生の独特の口調が魅力的であった。国語の樋口一治先生からは常山紀談を教わったが、その背景の戦国・江戸初期の歴史などの授業が特に興味深かった。残念ながら先生は、翌年二月肺炎で急逝され、安楽寺でのご葬儀には生徒全員が参列した。

以後、二年・三年の一学期までは勤労奉仕といって、クラス単位で年に何回か一週間か十日の日程で、農村の土木工事や麦刈り、草刈りの手伝いに行く程度で、やはり主たるものは学校の勉強であつた。ところが、三年二学期にいたり、学校を離れ「勤労動員」の名の下に、日章村の海軍飛行場（現在の竜馬空港の場所）の整備に駆り出された。兵舎に泊り込みで、毎朝六時前水兵さんの総員起こし五分前の連呼に目覚めさせられ、一日中土砂運搬のモッコかつぎをやったが、現在ならダンプ一台分に、どれだけの人力を費やしたことだろうか。

翌昭和二十年、今度は高知の町工場（軍需工場に転用）で出征その他でわずかに残った工員さんの指導を受け、工作機械を操作していた。その間七月四日の高知空襲の日、校舎は全焼、そして八月十五日の終戦の日を迎えることとなった。

◇終戦から卒業まで

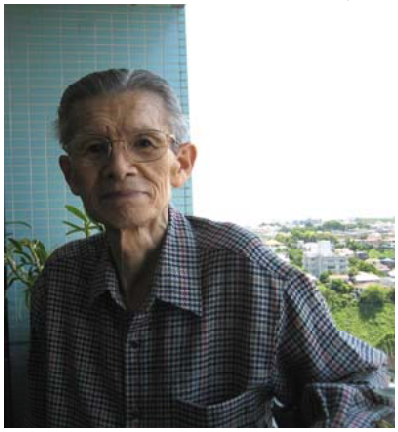
勤労動員から解放され、二十年九月から学期が始まる事となったが、校舎が無い。そこで、山田、佐川など各地での分散授業となり、私どもは大津の舟戸小学校に土電で通学した。当時は、教科書も無く、先生方がご自分で教科内容をガリ版で印刷され配って下さった。後から考えて、誠に頭が下がる思いである。この間、校舎再建のための材木を桟橋から大八車で焼け跡まで運んだりしたが、おかげさまで、二十一年夏、仮校舎が落成し、二学期から久し振りで全校生徒が一堂に会し、本格的な学校教育が再開された。私どもは、すでに最上級となっており、波乱の五年の中学生活を終了した。

◇昭和という時代

昭和元年十二月二十五日の昭和天皇のご即位から昭和六十四年一月七日の御崩御まで実に２２６６０日の長い日数である。

昭和初期は、相次ぐ戦争の時代であり、昭和十九年からのアメリカ空軍による国内都市への焼夷弾爆撃、そして遂には広島、長崎の原爆投下により神国日本、不敗の国日本の神話思想は脆くも崩れ去ってしまった。

敗戦後、連合国による占領、戦後の荒廃の中から立ち上がり、昭和三十年には「もはや戦後ではない。」といわれるように復興した。以後経済重点政策がとられ、東京オリンピック（昭和三十九年）大阪万国博覧会（昭和四十五年）など国際社会にも伍し、二度の国際的石油危機を乗り切ったが、昭和末年、土地価格・株価の異常高騰、いわゆるバブルに遭遇し、その崩壊とともに経済は停滞の時期に入った。その後、ようやく持ち直し安定した状況にあると考えられるが、日本社会、国民生活が昔に比べ豊かになったことは事実であろう。今後とも平穏な推移を望むや切である。



横浜の自宅にて

岡崎のおんちゃんの思い出話（六）

23回生　岡崎昌生

◇土佐中学校卒業のころ

昭和22年（１９４７）３月、土佐中学校５年を卒業した。（これは丁度旧制の最終となり、４月からは新学制の６・３・３制が行われ、新しく中学校～高等学校が誕生した。）

私どもの５年間は、戦中、戦後にかけての波乱の年月であった。戦争中は、勤労奉仕あるいは勤労動員と称して、農作業、土木事業あるいは、工場の工員の手伝いなどに駆り出され、また、アメリカの空襲により、校舎は焼かれ、昭和20年の終戦の日以後は近在各地の小学校に間借りするなどがあったが、多事多難のなかでも勉強に重点を置いた諸先生方のご指導ご努力に対し、未だに感謝の気持ちを忘れ得ない。中でも8月15日の昭和天皇の終戦の詔勅（いわゆる「玉音放送」）は、未だに記憶している。不敗の神国日本が鬼畜米英に敗れたこと、しかも、その事実を、神国の代表天皇自らの言葉、神の声によって発表されたこと、ただただ謹聴するのみであった。

９月にはマッカーサー元帥を総司令官とする連合軍が日本を占領することとなり、各都道府県に連合軍が駐留し、間接統治とはいえ、その管理下に入った。日本国民は、天皇のお言葉を守り「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」進駐軍の命令に服し、反抗など見られなかった。

連合軍は、まず財閥解体、日本の戦時体制を一掃する命令を出し、新しい政治への移行に着々と手をうっていった。

昭和21年11月には新憲法が公布され、民法改正による旧来の「家」の制度が廃止されるなど社会の改変が行われた。

一方、町は焦土と化し半ば廃墟の中に人々は暮らし、食糧難、インフレの苦しみも味わったが、復興への望みを持って人々の顔は意外に明るかった。

中学卒業後、継ぐべき家業も無く、高知には就職先も乏しく、食糧難の都会に出る気力も無かったところ、高知高校（旧制）に入る事となり、３年間を過ごした。

◇東京へ出て来てから

昭和25年（１９５０）２月、生まれて初めて「花の東京」に着いた。笈を負いてではなく、祖母にオニギリを10個ばかり作ってもらい、ジャコを紙袋に入れて、午前7時過ぎ高知駅発の準急南風に乗った。高松桟橋、宇高連絡船を経て宇野にいたる。宇野駅で東京行き２両編成に乗り（これは岡山で東京行きに連結される）、翌朝10時に東京に着いた。途中26時間を要したこととなる。

敗戦後５年を経ていたとはいえ、まだ焼け跡は残っており、復興は途上にあると思われた。先ず生きていくため、住は、先輩の下宿の片隅に同居させてもらい、衣は学生服など高知で作って持っていったが、食は外でのご飯・うどんには必ず外食券（縦１センチ、横３センチくらいの小片）を食堂に渡さなければならなかった。

同年６月、朝鮮戦争が起こったが隣国日本にはなんら被害は無かった。ただ、何ヶ月か経ったころ外食券が無くても外食が出来るようになった、そして町はなんとなく賑やかになってきた。これは所謂朝鮮特需の影響で、皮肉な事に戦争が景気に好影響をもたらしたものである。

国民は詔書のとおり忍び難きを忍び、耐え難きを耐えて努力した結果か復興は順調に進み、昭和30年には「もはや戦後ではない。」といわれるようになった。

◇同窓会関東支部のこと

昭和25年５月、春の青空の下新緑に囲まれて、小石川植物園で同窓会の集まりが開かれた。集まったのは家族同伴で60名ぐらいであった。当時はまだ配給制度で手に入りにくかった日本酒を宮地貫一さんが調達して下され、一同楽しく口にした事を思い出す。

その頃、同窓生は東京近辺で50名にも満たなかったが、最年長は１回生の片岡義信さんで、国鉄の自動車局長として丸の内北口のビルの広い部屋に鎮座されており額が少しハゲ上がっていたが、43歳の若さ、同窓生も20代30代がほとんどであり全員の年１回の集まりのほか、歓送迎会などをつづけてきた。

関東の同窓会で、６回生の近藤久壽治さんを忘れる事は出来ない。若い頃同学社という出版社を創業（主としてドイツ語関係、アポロン独和辞典を出版している。現在はご子息が後継）地の利を得た東京小石川に事務所があり、同窓会の打ち合わせに使わせて貰うなど、また、夕刻に及べば奥さんの手料理で、お酒を頂くことも数多く、万般に渡ってお世話様になった。

以後、東京に来る同窓生も次第に増加し、関東支部事務局の体裁も整い、事務局長41回の岩村康生さん、同じく鶴和千秋さんのお世話になり、次々に受け継がれ現在に至っている。

昨今では、年次総会、懇親会の参加者は３００名を超えるようになった。今後、益々の発展を祈る次第である。